イタリアンライグラスの上手な作り方

兼子・遠夫

最近の牧草栽培の中で、最も普及しているものにラデノクロバーとイタリアンライグラスがある。ラデノクロバーは周知の如く放牧地用として、イタリアンライグラスは集約的な多毛作あるいは高度輪作栽培の一員として、ともに非常な勢いで全国的に普及しつつある。我が国の気候風土に好適し、農業（酪農）上の要求にかなつて利用価値の勝れた牧草であることの、何よりもよい証拠であろう。

特にイタリアンライグラスは、従来のいわゆる多年性牧草とは全然趣きを異にする短期間利用の「草」として、酪農地帯の田畑の裏作にとり入れられているだけでなく、蔬菜園芸地帯においても、輪作の中に組入れられ、土壌を膨軟、肥沃、清潔に若返らせて、白菜や大根の病虫害発生を軽減するために役立つている。これはわが国の農業が、漸次穀草式農業（或は輪作式）の効果、必要性を認めてきた一風潮ともいえることであるが、酪農の発展とともに「草」の重要性が高まり、地力の維持や増産を期待できるようになり、水田においてすら見られる連作の弊害を打破しようとした気運にあるのは、何とも喜こばしいことであろう。

イタリアンライグラスは、九州地方から北海道に至るまで栽培範囲が極めて広く、しかも短期間に生育し、再生力も旺盛であるため、地方によりいろいろ異つた栽培利用法が行われているので、二、三御紹介しよう。先ずイタリアンライグラスの特性の概略は

1　原産地は地中海沿岸の北イタリヤ地方で、冬期温暖な湿潤地帯が最も適するが、わが国では全国至るところで良く繁茂し、土壌を選ぶことが少い。乾燥地帯の軽い土壌にもよく生育するし、灌漑栽培にも適している。

2　草丈一米以上に達し、分蘖力旺盛で、ツヤのある柔かい細葉を家畜は好食する。一年または越年性（東北北部、北海道では越年できない）で、生育が早く、再生力も強く数回刈取れるから収量が多い。また、耐寒性が強く早春の生長が速いから、早春の青草のさきがけとなり、牧草地の初年度の収量をあげるのにも用いられる。

3　多数の細長い根を土中に張るので、土壌に有機質を補給し、土性を膨軟にし、土壌若返りの効果が著しく、越年性であるから田畑の輪作に挿入されて注目をひいている。

4　普通、青草として利用するのが、種孕期に一せいに刈取つて乾草に調整し、またサイロへの詰込材料としても利用される。蛋白質含量がオーチャード、チモシーより高く、サイレージとした場合、一平方尺の重量が七貫位に相当する故、家畜に過給させないようにしなければならない。

以上の如く、イタリアンライグラスは種々勝れた特性をそなえているので、栽培利用の範囲が極めて広く、各地の立地条件に応じて興味深い栽培法がとられている。

冬ー春期の青草として

暖地では主として秋播き（十月中旬）し、翌春、他の牧草にさきがけて五月から六月上旬頃に青刈として用い、撒播、条播何れの場合も青草反当一、〇〇〇～一、五〇〇貫を得ている。大体オーチャードよりも一カ月早く刈取りができ、早春の生育の速いことで、イタリアンライグラスの右に出る牧草はない。草丈三〇～四〇糎の頃に刈りはじめれば晩春まで数回刈取ることも出来、非常に生産性が高い。（第一表）。鹿児島県各地では五回刈りで三、〇〇〇貫位収穫しており、外国の例でいえばイタリヤのロンバルジャ地方では二月末から十月まで六～一〇回の刈取りを行つて、反収約一、九〇〇貫を挙げており、英国では液肥を与えた土地で、一年間生草量を反当八、〇〇〇貫という驚異的な記録を報告している。わが国では、夏期暑熱の候に至つて急速に減収するので注意を要する。

普通十月の中旬に播種するが、九月中に播けば**十二月初旬から刈リ始める**ことができ耐寒性の非常に強い牧草であるから、冬中青々として家畜の好餌となつている。また逆に前作の収穫が遅れたような場合、十一月中旬下旬頃に播種しても差支えない。

（福島種畜牧場）

第一表　刈取回数別による生草収量の変化

	四月九日	四月二六日	五月一日	五月一五日	五月二五日	計
一回刈区						
二回刈区		九六〇				一、九〇一
三回刈区	三六八		三六〇	一、一〇一	四八六	二、三六六
					三三〇	九八四

註　1　単位　反当り　貫

2　播種期　九月二日　撒播　三五ポンド

しかし、大体各地方の大小麦の播種期に準じて播くのが発芽越冬に好条件で、良い収量が得られている。特に霜害のひどい地方では踏圧を二三回やればよい。

九州地方にいろいろの

永年性牧草を導入したところ、暑熱が烈しく、極めて限られた種類しか有利でなく、禾本科ではトールオート、オーチャード、イタリアンライグラスの三種類位のものであった。しかも二年目以降の収量が、初年目の六割前後に減少するので、このような地方では多年性牧草よりもイタリアンライグラスやクリムソンクロバーなどの、一年性牧草の栽培が有利なことがわかり、イタリアンライグラスは二期に分けて播種し、十二月〜二月と三月〜六月まで栽培利用している。今まで青刈えんばくを多く利用していたが、イタリアンライグラスの方が刈取後の枯死株が少く、再生力が旺盛でおそくまで刈取ることができ、その収量も差異がないので将来は青刈えんばくに代るべき作物と、九州農試では推奨している。

一般に、九州や関東地方などの火山灰土壌でクリムソンクロバーのよくできる地帯に、イタリアンライグラスの生育が旺盛で、クリムソンクロバーも一年性でクロバー類中、春最も早く生長をするものであるから、**クリムソンクロバーとの混播**が有利である。即ち二尺畦幅で条播する場合は、先ずクリムソンクロバーを九月中旬乃至下旬までに播き、約一カ月遅れてクリムソンクロバーの条間にイタリアンライグラスを条播する。つまり一尺畦幅でクリムソンとイタリアンを交互に播きつけることになり、そうすることによって生長も開花出穂期も殆ど一致して、理想的な青刈飼料や乾草を得ることができる。ことに冬中イタリアンライグラスは、クリムソンクロバーを保護して冬損を避けさせ収量は反当り二、〇〇〇貫以上を確保できる。外国でも南ヨーロッパ、ニュージーランド、北アメリカの太西洋岸でクリムソンクローバーの適地によい生育振りを示している。

また、多年性牧草は一般に初めの生長が遅いので、**牧草地の初年目の収量を挙げる**ためにイタリアンライグラスを少量混ぜ播きする。(第二表)。ラデノクロバーの放牧地造成の場合にも少量混播するのが常識となっており、播種量は反当〇・五封度位が適当で、過繁しないように早目に刈取ることが肝要である。イタリアンライグラスを長期間繁茂させたまま放置すると、他牧草の生育を抑え下葉が腐って来て思わぬ失敗を招くことがある。

第二表　第一年目の刈取期別生草収量(春播)　(佐々木泰斗氏)

刈取期	六月二二日	七月一三日	八月四日	九月二四日	計
チモシー	三三四	—	一七三	七六	五七三
オーチャード	—	四八三	—	三〇三	六六五
イタリアンライグラス	九五五	二四一	一三八	一七〇	一、五二四
赤クロバー	—	四二三	—	三五	四四八

註　単位　反当り　貫

水田裏作物として

最近暖地でイネの栽培を前後に移動させて、早期作晩期作とすることが行なわれ、そうすることによって風害や秋落ちなどの災害をさけているが、それと同時に裏作の期間を自由にして裏作物の種類を増し、場合によっては二種類の裏作物をイネと組合わせて三毛作とし、総合的に水田の生産力を高め、集約的な高収量をあげる方法がとられはじめている。現在、裏作物として野菜類や工芸作物がとり入れられているが、これらは土地から大量の収穫物をとり去ってしまうから、長い目で見た場合、水田の生産力増強に役立っているとはいい難く、ここに地力を高めるために是非とも牧草の導入が行われなければならない。牧草はいうまでもなく、一時的に青刈として土から取り上げるが家畜の腹を通して有機質を土中に還元し、跡地に豊富な根群を残すから、土を肥やすこととなり、**イネの収量を高める**ことができるのである。

イタリアンライグラスを、レンゲやベッチ、赤クロバーと同様に落水後五日目頃(足あとに水が残っていない程度に乾いてから)に中播きし、立毛中のイネと重なる期間は大体三〜四週間が適当で、九月下旬から十月上旬ごろまでに播けば年内及び二〜三月に青刈草を得られる。コンモンベッチと混播すれば、コンモンベッチも再生力が強いから二番刈、三番刈でもベッチとイタリアンとが半々に混じった生草が得られる。播種量はイタリアン三听、ベッチ三升(レンゲ五合、赤クロバー三听)。

イネの立毛中は、光量が外の光の一〇分の一しかとどかないので、ひよろ長く伸び多少貧弱に見えるので、あきらめてすき返してしまう人があるが、なるべく早く肥料を施こせば、やがて根づいて、丈夫な草姿となりベッチも新しい分枝を生じてきてよく茂るものである。肥料は化学肥料か液肥を実取麦類の約半量位を施こす。

耕起畦立て栽培にすれば、更に生育が良く、えんばく、ベッチの三者を混ぜまきする。耕起栽培では、特にえんばくの初期生育が旺んで荳科を被圧し易いものであるから、えんばく播種量を一・五〜二・〇升に減らし、施肥量も窒素の量を少くして、燐酸加里を主体として施した方が、荳科の生育を促進させて均衡がとれ、一番草はえんばくとベッチが優占し、**二番草三番草**でイタリアンとベッチが得られる。なお、播き幅はなるべく広くして田畑全面を茎葉でおおうようにした方が収量が多いもので、早期作イネのあとを耕して幅六〜七尺の大畦をたて、その上全面に撒播するのがよい。つまり畦というよりも排水と種子の土かけのために溝をあけて播くわけである。

青刈えんばくとの混播は畑作においても同様で、えんばく茎間の隙間をイタリアンライグラスの豊富な茎葉で埋め、えんばくの青刈収量を高めると共に、やはり二番刈三番刈に大いに役立っている。この場合も蛋白成分を補うために、ベッチやえんどうが反当二〜四升の割合で混播されるのは勿論である。

また北海道においては、イタリアンライグラスとクリムソンクロバーを四月下旬に混播して七月初旬に七〇〇〜八〇〇貫の生草を収穫し跡地にかぶやデントコーンを播いて、北海道では珍らしい二毛作を行っているところもある。

灌漑草地用としては長野県人岳山麓地帯